資料紹介

むし双六の和歌

池和田　有紀

はじめに

『むし双六の和歌』（函架番号一六三―八八〇、一冊・一枚）は、虫や動植物が登場する物語草子と、その物語世界を絵画化した双六がセットで伝来する、非常に珍しい作品である。草子・双六とも表紙は、上部が青、下部が紫のうち曇り紙。外題は草子・双六とも同筆で、朱の直書きである。草子の外題は「むし双六の和歌」、双六の外題は「むし双六」。以下、草子を『むし双六の和歌』、双六を『むし双六』と称する。江戸時代前～中期頃の制作とみられるが、物語の内容は、建保六年（一二一八）八月に催された中殿御会和歌をふまえた、和歌を主軸とする異類物お伽草子の一つである。本稿ではまず、物語の梗概と書誌および双六の遊び方を紹介し、次いで、虫を主題とする既知のお伽草子との比較などを通じて、本作品の成立環境や享受層について若干の考察を加えたい。

一、『むし双六の和歌』の梗概

『むし双六の和歌』は袋綴一冊（大和綴じ）で、墨付き七枚。縦二六・一cm×横一九・五cm。半丁分の行数十三～十七行。料紙は楮紙で、紙の表面に水滴で模様を施す「水玉紙」の技法[1]がみられる。他に伝本を聞かず、書名からは双六のためのオリジナル作品のように見受けられるが、書き損じ等の箇所もあり、丁寧な清書本とは言い難い。明治二一年（一八八八）に宮内省に設置され、御製や御歌会などを所掌した御歌所の旧蔵書として当部に伝来（御歌所本）、それ以前の所蔵者は不明である。しかし後述のように、物語の内容は、和歌を主体とする異類物のお伽草子の典型であり、かつ手描きの絵双六も非常に細密で典雅な趣向に富むことから、古典や和歌に精通する皇族・公家・門跡や上流階級の女性の間で享受された可能性が極めて高い。物語の梗概は、次のとおりである。

葉月の半ばの月の美しい晩、ある人が神楽岡に詣でたところ、様々な虫の声の中に、松虫と鈴虫の嘆きが聞こえた。「神楽岡に長く棲みながら、ただ

鳴きあかし、時に大宮人の沓の音に驚き、ともすれば童の虫籠に入れられ憂き目に遭う。玉敷きの御庭や玉虫へのあこがれは募るばかり。この思いを誰か届けてはくれないだろうか」。折しも空行く雁が飛来、きりぎりすの協力によって松虫鈴虫の願いは雁に託される。雁の詠歌を宮人が聞きつけ、やがてお上より、今宵吉田の神楽岡なる虫の音を聞こし召したい旨の仰せがあった。立ち帰った雁からこれを伝え聞いた松虫鈴虫は大喜び。多くの供奉の虫たちとともに、一行は御所の御庭を目指す。またそれを聞きつけたのは狸と狐。狸は皷を打ち、狐は先に立って狐火で道を照らしながら供奉に加わるのであった。一行はとうとう賀茂川を渡り、清涼殿（中殿）の御庭に着く。建保六年の昔、名月を愛で中殿御会が催された。和歌の題は「池月久明」。定家・家隆ら名だたる歌人が参加したものである。まずはその折の御遊を真似て、生き物たちはさまざまに鳴き声を上げる。ついで池の蛙を筆頭に、面々は「池月久明」の題で和歌を詠み合い、御代の久しきを言祝ぐのであった。

物語全体に和歌がちりばめられ、とくに末尾には、建保六年の中殿御会に擬えて動植物たちの詠歌二六首が配列される。

二、『むし双六』の遊び方

『むし双六』は、縦七五cm×横九四・二cm。大判の絵双六で、約二五cm×二四cmになるように折りたたまれ、表紙・裏表紙部分は厚紙で裏打ちされている。

現代の我々にもなじみの深い絵双六は、室町時代に作られはじめ、木版印刷技術が発達した江戸時代中期以降大流行した(2)。絵と文字を使って一枚の紙に世界を描く江戸～明治の絵双六には、多種多様な図柄があるが、現存する双六のほとんどは版本で、本双六のような手描きの作例はごく僅かである(3)。

マスの数は全部で四十六。マスの形は八cm×一九cm程度の扇形、もしくは一〇cm×一四cm程度の団扇形で、扇と団扇が交互に、少し重ねて配置される。各マスには、刷毛で銀を引いた上に、物語の内容に沿って動植物や虫の姿が描かれる。十五夜の情景を表わすため、銀色の満月や秋草が随所に描き込まれているが、マスの外の下地は金砂子散らしで，絵や文字はない。

各マスには絵のほかに、墨書が多くある。ここでは全四十六マスに便宜①～㊻の番号を付し、文末の表に各マスの画題と文字情報を一覧化した。まず、一つ一つのマスに名称が付けられている。振り出しに相当する一番目のマスは①「月おもしろきよ」、上がりに相当する㊻は「清涼殿」。この二つのマスは他に比べてサイズがやや大きい。マスの配列は時計回りに外側から内側に向かう蝸牛型で、②「松むしすず虫のいへらく」③「世をわたるも」④「わらわへの」…と続く。実はこれらのほとんどは『むし双六の和歌』の物語中のフレーズで、それがそのままマス名に採用されている。（文末に全文を翻刻し、該当箇所をゴシック体で示した。）次に、各マスには必ず、描かれた動植物にちなむ和歌が一首ずつ記される。（①と㊻のみは二首ずつ。）さらに、各マスには「池」「月」などの文字とともに、他のマス名の幾つかが書き込まれている。最も多いのは振り出しの①のマスで、

池　すむよなよな　月　はるかにかりかりと
久　世をわたるも　明　松虫すす虫のいへらく
和　わらハへの　歌　さてうれしくも

の六つ、次の②のマスは、

月　さやかなる　　歌　ミはしなる

の二つ、その次の③のマスは、

池　かけしつはさ　　明　こよひの月に

と、以下㊺まで、ほぼすべて二つずつある。そして最後の㊻にはない。じつはこれが『むし双六の和歌』をプレーする際に非常に重要な役割を持つ。現在よく知られている双六のルールとは、サイコロを振り、出た目の数だけ進み、早くゴールに着いたほうが勝つ、いわゆる廻り双六である。これに対し本双六は「飛び双六」のルールを持つ。飛び双六とは、マスに移動先が示してあり、出目に従って、マス目を次々に飛び移っていく。振り出しの「池・月・久・明・和・歌」の六文字は、建保六年中殿御会の題「池月久明」に因むことは間違いない。そしてこの六文字こそが、サイコロの目であったと推察される。(4)

まず、二人以上のプレーヤーがそれぞれのコマを、スタート地点①「月おもしろきよ」に置く。ちなみにコマは現存せず、専用に誂えられたものがあったか、あるいは小石や貝殻などを用いたかも知れない。次に順にサイコロを振り、例えば「池」が出たら⑤「すむよなよな」のマスに、あるいは「月」が出たら⑥「はるかにかりかりと」のマスに、それぞれコマを移動させる。⑤「すむよなよな」にコマを置いたプレーヤーは、次にサイコロを振り、「池」が出たら㊲「ほたる」に、「歌」が出たら⑲「くずのうらは」に飛ぶ。それぞれのマスに、次の移動先は二つずつしか示されていない。従ってそれ以外のサイの目が出たら一回休み、つまりマス⑤にいる場合は、「池」か「歌」の目が出るまで留まり続けなくてはならないということであろう。こうしてマスの指示に従って次々にコマを飛び回し、先に㊻「清涼殿」に到達したら勝ちである。ちなみに清涼殿に到るには、㊴「まつむし」㉖「くるま」のどちらかのマスにいて、「池」の目が出たときだけである。

このほかに興味深いのは、⑱「たちかへり」㉚「とかくたのむは」の二つのマスに、それぞれ「賞を出す」「賞をうける」と墨書があることである。すなわち⑱にコマを進めたプレーヤーは、何か賭け物を出さなくてはならず、反対に、㉚に来た場合は賭け物を受け取れる。以上が簡単なルールである。

お伽草子の伝本中、絵巻・奈良絵本の形で伝えられるものは多いが、本作品は色彩豊かな双六によって物語世界が可視化される点で異色といえよう。

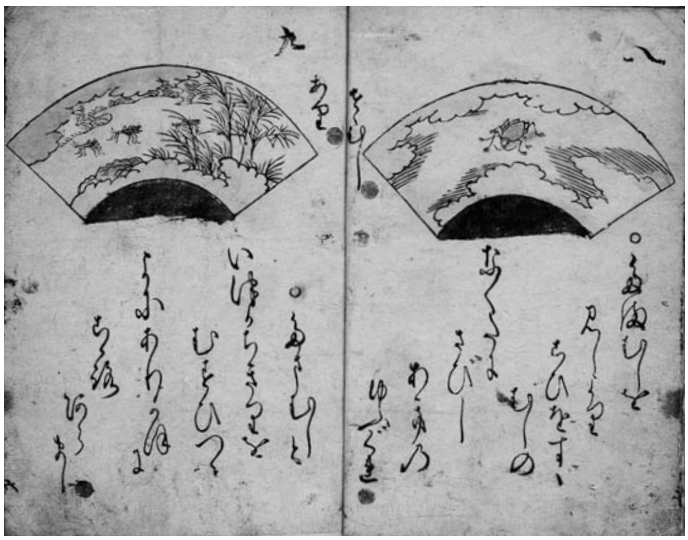
三、虫の異類物お伽草子との比較から

室町時代から江戸時代初期にかけて成立した短編物語類のうち、動物や虫など、人間でないものを主人公とするものを異類物お伽草子といい、その数は現在知られているだけでも約四十種を数える。(5)中でも虫を主とするものには、『玉虫の草子』『虫妹背物語』『虫の歌合』『虫の庭訓』『こほろき物語』の五種類がよく知られる。いずれも和歌や歌合が物語の大きな要素となっている。

最も成立が古い『玉虫の草子』は、美しい玉虫姫にあこがれる虫たちがそれぞれに和歌を送るも、姫の心は一向になびかない、という内容。その淵源は『古今集注』の解釈にまで遡るという。(6)よく流布したお伽草子の一つで、天正十年（一五八二）の古写本は、優れた和歌を姫に贈った「まつむしのさだいじんどの」に、玉虫姫が応じるというもので、和歌の功徳を説く。一方、同じ『玉虫の草子』でも、姫が誰の求愛にも応えず、仏道修行に明け暮れた

という結末を持つものや、往生譚が加えられたものもある。(7) お伽草子は室町物語とも称されるが、このように江戸時代以降に形を変えて流布したり、新たに作られたりする作品も少なくなかった。とくに異類物の草子は、寛永から元禄年間かけて非常に流行し、この頃の俳諧の中に、異類物草子を題材にした句が数多く存在するという。(8)

『むし双六の和歌』は、物語の序盤、松虫鈴虫が玉虫への憧れを述懐し、その部分に対応する『むし双六』のマス⑪には玉虫が描かれる。従って、『玉虫の草子』を下地にしていることは明らかであろう。ただし玉虫への言及はその場面に限られ、物語終盤の二六首の中にも玉虫の和歌はない。おそらく御所への憧憬の象徴として、玉虫を登場させたとみられる。



大阪青山歴史文学博物館蔵『玉虫の草子』「すすむし」「あり」部分

ちなみに『玉虫の草子』には、寛永年間頃の作とされる丹緑本が伝存、扇形の枠の中に草花と虫の絵が、その下に和歌が散らし書きで配される。これは『むし双六』が、扇・団扇を交互に配置し、その中に草花・虫・和歌などを描き込んでいるのとよく似る。丹緑本は現在、大阪青山歴史文学博物館所蔵の一冊しか知られていないが、もし当時流布していたとすれば、『むし双六』の構図に影響を与えた可能性があろう。なお扇形の中に歌意が図像化され、周囲に和歌が散らされる形式は、明らかに室町末から江戸初期にかけて流行した、「扇の草子」のそれである。(9)

ところで、『むし双六の和歌』のハイライトの一つは、虫たちが行列を仕立てて神楽岡を出発、賀茂川を渡り、御所を目指す場面である。供奉の虫たちが、「いざや行れつしめさんと　楓の一葉を手にもちて　草筆とつて書附」けた「行列図」は、当時の人間社会の儀式に用いられた行列図さながらで（翻刻(3オ)参照）、マス㉑～㉘、㊱～㊺の図像がこれに対応する。㉘走雑色が蜂であるのは、「はちり雑色」と掛けているからで、松虫鈴虫が乗る車に付き従うのは、馬に関わりの深い名を持つ㉖轡虫。㉓白丁役の蝗二匹は紋白蝶の羽を纏っている。笠持ちは蛍以下の面々で（㊱㊲㊵～㊺）、物語終盤の和歌の中にも、「諸虫うたふ」として、「宮人は桜をかさして出たれど　月の笠にはしくものはなし」と、笠が詠み込まれる。

こうした虫行列のモチーフで知られるのが『虫妹背物語』である。これは、やはり玉虫姫を主人公とし、姫が蟬の衛門督の求愛を受け入れ、祝言を挙げ、子を授かって一族が繁栄するという、異類物には珍しいハッピーエンドである。主要伝本の幾つかは絵巻で、(10) 例えば慶應義塾図書館所蔵の江戸時代前期頃とされる写本には、長大な嫁入り行列が描かれる（慶應本の書名は「虫物語」）。前後に諸虫が供奉し、牛ならぬ蝸牛が姫の乗る牛車を牽く。ただしこの虫たちは、顔は虫ながら人間の手足を持ち着衣し、表情に乏しいのに対し、『むし双六』は、虫は本来の姿で描かれ、狐や狸に表情が見られる点が特徴的である。なお今橋理子氏によれば、「〈虫行列〉という図像は「富貴」や「子

慶應義塾図書館蔵『虫物語』部分

孫繁栄」といったいわゆる吉祥の意味を持つ」もので、『虫妹背物語』の嫁入り部分は、幕末期に流行した「虫行列図」の先行例であるという。(11)

一方、『玉虫の草子』『虫妹背物語』が恋愛譚であるのに対し、『虫の歌合』『虫の庭訓』『こほろき物語』の三作品は、多くの虫の詠歌を列記することに主眼が置かれることから、じつは『むし双六の和歌』のテーマはよりこれらに近い。異類物お伽草子のうち、動植物が歌を詠み合う作品は、「(擬)歌合物」に分類され、その特徴の一つに、「動物達の歌合をじかに見聞きした隠者らしき人物の配置、という共通の設定」があるという。(12) 実際『虫の歌合』『こうろき物語』は冒頭部分にこの特徴がみられ、『むし双六の和歌』の冒頭も、「ある人、葉月の半ば、月いと面白きにうかれ出て、神楽岡に詣でけるに、分け行く浅茅を、露ところせう小笹のしけみに、さまざま虫の声満ちたり」とあるから、明らかに同じ趣向といえる。

なお『虫の歌合』は『四生(虫・鳥・魚・獣)の歌合』の一つで、伝木下長嘯子(一五六九~一六四九)作とされる。玉虫の君に歌を贈るも拒絶された哀しみから、「こうろぎ」の呼びかけに応じた虫たちが十五番の歌合を開催、その判者に選ばれたのは「やぶのもとのひきがいる」であった。和歌会を呼びかけるコオロギと蛙の判者という構成は、『こほろき物語』にも共通する。(13)

呼びかけの内容が、虫の命のはかなさ、浮き世の辛さを和歌に託して詠み、心を慰めようというのも同じである。この点、『むし双六の和歌』もまた、松虫鈴虫が儚い身の上を嘆くところから始まり、さらに物語終盤の和歌会において、「また池にすむかわづをはじめ、うたよみ奉」と、詠歌の筆頭に蛙を据える所に、共通点が見出せる。

なお、御所への憧憬と、御代の讃美という点においては、『虫の庭訓』の序に、「我　両君の御めくみは、庭の蓬の露より繁く、(中略)幸にわれらも御園の虫として、非常のたくひにもあらす」などとあるのに通じる。(14)

このように『むし双六の和歌』は、これまで知られている虫のお伽草子にいくつもの共通点が見出せることが判明した。とりわけ、玉虫への憧憬・虫という儚い存在の嘆き・蛙を筆頭に始まる和歌、という三点が包摂されている点においては、『虫の歌合』の影響が最も顕著で、少なくともその成立は、『虫の歌合』以降と断定することができるだろう。

四、享受層

ところで、虫たちが御所を目指し、和歌を詠み御代を言祝ぐという内容に照らすと、実際に『むし双六の和歌』を楽しんだのは皇族・公家・門跡などであったと想定される。あるいは女性達、皇女や女房、尼僧の可能性もあろう。(15)

草花や野菜に昆虫を組み合わせる絵画の構図は、宋~明時代に制作された草虫図にルーツを持ち、日本でも早くから珍重された。また寛永年間の後水

尾院の周辺における立花の隆盛や、天正～寛永の宮廷における園芸趣味・草花愛好などを背景として、江戸前期には草花図が非常に流行し、江戸時代を通じて主要な画題の一つになったという[16]。本作品もまた、こうした草虫画・草花図ブームの中に位置づけられるに相違なく、『むし双六』は、皇族や公家の発注を受けた俵屋などの絵屋か、あるいは狩野派・土佐派などの絵師たちによって制作された可能性がある[17]。

また、物語の重要なモチーフである建保六年中殿御会については、鎌倉期の成立とされる『中殿御会図』[18]が有名だが、『むし双六の和歌』終盤の和歌二七首の列記は、この『中殿御会図』の末尾に記される序・和歌を意識したものであることは間違いない。作者は中殿御会和歌に関する相当の知識があり、当然『中殿御会図』の原本か模本を実見していただろう。じつは『中殿御会図』は、寛永年間に九条家から後水尾院に貸し出された経緯があり、それ以降、公家社会や絵師の間で注目されるようになったと考えられる[19]。このこともまた本作品成立の契機の一つかも知れない。

おわりに

『むし双六の和歌』の物語構成は異類物のお伽草子の典型であり、かつその情景が色彩に富んだ双六によって絵巻・絵本同様に可視化され、遊興の要素も加わることで、豊かな世界を作り出している。他の異類物お伽草子との内容比較、宮廷社会における草虫図などの賞玩、『中殿御会図』との関わりなどから、その成立は少なくとも寛永年間以降と推測されよう。なお冒頭で触れたように、料紙に水玉紙が用いられることから、もう少し下る可能性もあり、ひとまずは江戸時代前～中期頃の作としておきたい。

最後に、虫の呼称について少々触れておく。古典文学において松虫・鈴虫の呼称は、現代のそれと逆で、真黒でリンリンと鳴くのが松虫、褐色でチンチロリンと鳴くのが鈴虫、とされてきた。この見解に対し、じつは認識を取り違えていたのは、江戸時代の京都の一部知識人のみに過ぎず、一般的には現在の理解と相違なかったとの説もある[20]。この点、『むし双六』では、㊳鈴虫が褐色なのに対し㊴松虫は真黒と、明らかに現代の認識とは逆転して描かれている。また、古典文学における蟋蟀（きりぎりす）はどちらもコオロギのことで、キリギリスは機織虫と称されたというが[21]、『むし双六』では、⑦きりぎりす（こうろぎ）と㊸こうろぎは別の姿として描かれ、現在のそれぞれの姿・呼称と一致する。（機織虫は別に存在し㊵、姿はクビキリギスに似る。）このほか、物語中に登場する「たけのむし」もキリギリスの可能性があるなど[22]、昆虫の呼称や描かれ方にも、成立経緯や制作者を探るヒントがあるのかも知れない。本稿が更なる研究の進展につながれば幸いである。

註

（1）久米康生『和紙文化辞典』（わがみ堂、一九九五年）「水玉紙」「落水紙」の項。

（2）加藤康子・松村倫子編『幕末・明治の絵双六』（国書刊行会、二〇〇二年）、山本正勝『絵すごろく　生いたちと魅力』（芸艸堂、二〇〇四年）、並木誠士『江戸の遊戯　貝合せ・かるた・すごろく』（青幻社、二〇〇七年）、枡田静代『絵双六　もうひとつの楽しみ方』（京阪奈新書、二〇一八年）などを参照。

（3）なお、双六ではないが、虫が詠じた和歌をカルタに仕立てた「虫尽歌かるた」（江戸後期作）がある。（2）並木著書の六六～七頁を参照。

（4）賽の目が一～六の数ではなく文字である例は、国立国会図書館所蔵「官職昇進双六」（祚・品・位・階・等・級の六文字）などがある。（2）加藤康子他編書の二〇頁を参照。

（5）徳田和夫編『お伽草子事典』「異類物」の項（東京堂出版、二〇〇二年）

（6）徳江元正「夏虫の思ひ―「古今註」から「お伽草子」へ―」（『新日本古典文学大系　月報』七（岩波書店、一九八九年）。

（7）徳田和夫「お伽草子『玉虫の草子』の変奏―新出伝本の紹介と翻刻を兼ねて―」（説話と説話文学の会編『説話論集』第八集、清文堂、一九九八年）

（8）母利司朗『俳諧史の曙』（清文堂、二〇〇七年）。

（9）安原眞琴『『扇の草子』の研究』（ぺりかん社、二〇〇三年）、並木誠士『絵画の変』（中公新書、二〇〇九年）、吉田さち子「団扇形考―建築内部装飾・扇面画の諸例より―」（『美術史研究』三八、二〇〇〇年）など。

（10）石川透「慶應義塾図書館所蔵〔虫物語〕解題翻刻（『古典資料研究』一、二〇〇〇年）、『新天理図書館善本叢書　第三〇巻　奈良絵本集　八』（八木書店、二〇二〇年）「虫妹背物語」解題（齋藤真麻理）。細見美術館所蔵『きりきりす絵巻』（住吉如慶筆、十七世紀）も、同じモチーフの絵巻である。

（11）今橋理子『江戸の動物画』（東京大学出版会、二〇〇四年）。

（12）渡邊亜紀「黒川文庫蔵『こうろき物語』解題・翻刻」（『実践女子大学文芸資料研究所年報』二二、二〇〇三年）

（13）中野幸一「資料紹介『虫の庭訓』と『こほろぎ物語』」（『学術研究―国語・国文学編―』二六、一九七七年）。

（14）中野幸一編『奈良絵本絵巻集』一一「解題」（早稲田大学出版部、一九八八年）および（12）参照。

（15）例えば『玉虫の草子』天正写本の奥書に「おひかし御れうにんさまいらせ候」とみえ、『虫の庭訓』の奥にも「寿覚尼君」とあるなど、女性による書写や所蔵例が散見される。

（16）野口剛・五十嵐公一・門脇むつみ著『天皇の美術史』四（吉川弘文館、二〇一七年）および（11）参照。

（17）村重寧「近世初期土佐派の「細画」―光吉・光則の新奇―」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』五三、二〇〇七年）

（18）小松茂美編『続日本の絵巻』一二（中央公論社、一九九一年）。

（19）『道房公記』（宮内庁書陵部所蔵　九―五一一九）など。なお九条家の『中殿御会図』と朝廷との関係については別稿を用意している。

（20）冨永美香「鈴虫・松虫考―転換説への疑問―」（『人間文化研究年報』一八、一九九四年）

（21）植木朝子『虫たちの日本中世史』ミネルヴァ書房、二〇一一年。

（22）阿部光典『昆虫名方言事典』サイエンティスト社、二〇一三年。

（凡例）

一、改丁の箇所には、」を付し欄外に紙数を(1オ)(2オ)のように表記した。

一、本文中に適宜読点を付し、校訂注は（　）に入れた。

一、訂正箇所はすべて原文のまま、左傍に見せ消し記号ゝを付し、右傍に訂正文字を記した。

一、本文中、『むし双六』のマス名に相当する語はすべてゴシック体で示した。

(1オ)

（表紙外題、朱筆）「むし双六の和歌」

ある人、は月の中は、**月いとおもしろき**にうかれいてゝ、かくらおかにまふてけるニ、わけゆくあさち、つゆところせう、おさゝのしけミに、さま〴〵むしのこゑミちたり、

かりころもすそのゝつゆをわけゆけハはらハぬそてニ月そやとれる

むしのねのしらへすミゆくかくらおかあまつ乙女も月にまふらん

かす〳〵のむしのこゑのうちに、**まつ虫すゝむしのいへらく**、われらもこのかくらおかにとしひさしくすミ侍りけれと、さしたるわさもなさす、つゆふかき小さゝかなかに、世をのミなきて、**よをはたるも**いとほいなし、かくらおかの鈴むしよたゝなきあかす、人まつむしもあたら秋のよをうらミかこちて、おり〳〵ハ大宮人のくつの音におとろき鳴すさミ侍りて、やゝもすれハ**わらハへ**の手にもてるこに入られて、くるしきめにも逢ける、つら〳〵思ふ(1ウ)にハ雲の上玉しきの御庭とかや、我らのつたなき身に」あふくもいとあふけなけれと、月**すむよな〳〵**、ちかきまもりの萩の戸、めくミのつゆの玉むしを、恋わたりつゝ秋をへて、いひ出んよすかなけれハ、いたつらに長きよな〳〵鳴あかし、草葉にあまるしらつゆを、たれか雲井につけやらん、おりしも**はるかにかり〳〵と**きこゆる声ハ雲井なる、天津御そらのたよりなり、**さてうれしくも**きり〳〵す、その二君のもの思ひ、厂(雁)の翅にかけてたへ、そら行厂ハはる〳〵と、おほつかなくも立よりて、思ひにあまるきりきりす、

およひなきくも井なれとも**ゆきかよふかりの**つはさニかけてたのまん

かくらおか神のまつむしすゝむしハ雲井をかけてなかぬまもなし

おほつかなくも大そらをハたる厂かねおとろきて、もりのはかくれ立よれハ、**月さやかなる**かくらおか、をもしろき音の中にも二つの虫のあハれなる、こゑハ中〳〵しつか也、さても頼むハきり〳〵す、ひかりことなる**玉しきの**、(2オ)ミきハに」まします玉むしを恋わたり給ふなるこゝろをはらせたまへり、君ハ名にあふ恋草に、**かけしつはさ**の文のかす、あハれ一葉をかけ給へ、厂もあハれニ思ひつゝ、いさや玉章言伝ん、身に秋かせハふくとても、かならす暫しまち給へ、雲井をさして秋かせに、さそはれてゆく厂かねハ夕霧かくれはる〳〵と、**思ふも高き**くものうへ、おほろ〳〵と大空に、我よふ人も聞えねハ、厂ハ鳴てハ立まよひうたへる、

宮人もあハれハかけよおもひくさ一葉をかけしかりの玉章

みや人おとろきて、

はる〳〵と雲井をさして厂ハきぬそのことつての玉章や何そ

鈴むしまつ虫、

たまむしにひかりを頼むすゝむしハつゆのよすかをまつんしのこゑ」(2ウ)

つゆしけき小さゝか中に年をへて雲井の月を恋ぬまもなし

はやる文を**御はしなる**たけのむしこそ中立なれ、**大宮人の**笛の音にそへてこちくのおのか音を、思ふ限りニつくしつゝ、いつしか上にきこしめし、**こよひの月**に吉田なる、かくらおかなるむしの音を、きこしめしたき仰こと、くも井の厂につたやれハ、厂ハうれしく**立帰り**、その仰ことつたへれハ、草葉にあまるきり〳〵す、我も〳〵とよろこひて、二つの君に申すそ、二虫の声たかく、

くものうへにのほるときけハつゆのミのおき所なきこゝちこそすれ

うれしなき音をも立ぬれハ、多くのむしのきゝつたへ、はれも〳〵とはい出て、中にもわきてもの思ひ、こうろきこそハいちしるく、扨もかくまてものおもひ、われらも同しうき秋に、なかき思ひを**くすの葉**の、うらふれわたる(3オ)秋かせに」身をえうなしものに思へれと、きえかてわするつゆのミの、思ひをまつへきよすかなし、この一ふしにあふけなき雲の上なる月のかけ、あふきまつらんうれしさよ、さらハ名にあふ二君の供奉しまつらんいさやとて、川原に生る**なてしこの**、花をかさして立出ぬ、かくら岡にハ**供奉のめい〳〵**あつまりて、いさや行れつしめさんと、楓の一葉を手にもちて、草筆とつて

書附る、

走雑色　舎人　**随身**　**白丁**

車　松虫
くつは虫　鈴虫
馬おい
〃　〃　〃
〃　〃　〃

かさもちたち、

ほたる、蛙、はた織、かまきり、ミのむし、こうろき、たぬき、きつね、

(3ウ)
供奉のめい〳〵声たてゝ、その音たへなる秋のよに、聞人」とてハむかしより、**おはなかもとの**古狸、つら〳〵聞て世にふれハ、めつらしきもの侍るかな、はかなきつゆのいのちなる、むしさへかゝる願事、いとあふけなき事なりき、我とてよにもおそろしき、老そのもりの木かくれに、月のよな〳〵あふきつゝ、月より外に友もなし、せめてハ供奉にさふらハんと、小萩尾花を振もちて、**とかく頼むハ**きり〳〵す、こよひのくふにつれたまへ、大鞁ハおのか得るところ、月にゑひしてうちふせんと、ひたすらに頼むその声、おそろしく侍るれと、またよにしらぬたへなる音を、いかて聞へき事あらんと、めい〳〵うれしく承合たり、扨又は月の十五夜の、子の刻ころと思ふにそ、供奉のめん〳〵うちそろひ、行れつたゝして出給ふ、狸ハ**ひとり先に立**、我より先のともし火ハ、**きつねそ**かけてきにけるか、扨もこよひのおもしろさ、

(4オ)
いさやおさきを」てらさんと、いふにそ虫のめん〳〵ハ、かくらおかにてつねにきく、大ミや人のくつの音にさへおとろきしニ、生ほころへる花すゝき、いともミたれて声さへハ、かれ〳〵としてよるへなし、いかゝハせんと思へとも、二つの虫ハ中〳〵なれもおもしろし、こよひの月にうかれ出る、古狸さへつゝミうち、めい〳〵むしの音をつくし、たれか今よひのものゝ音を、きく人とてハ仙人か、かつらのかけの男也、今ハくも井の乙女ニも、なとかこゝにハきて舞らん、時もうしミつとおもふにそ、雲井の井の月ハくまもなし、**吉田の野へを**連行は、はるかに聞ゆ川瀬の、月にかよひてすミ渡る、きつね火先に**道をてらし**、狸もしほれる声なから、月にうかれて声高し、よふ〳〵川瀬をうちわたり、道すからなるおもしろさ、ほとなくくも井に着にけり、

(4ウ)
もろ〳〵のむし一声にうたふ、

くもりなききミと月とのくものうへにいくあきかけて」音をやつくさんまつむし、

もろともにきミをちとせとこよひよりときはの松の音にやかよはんすゝむし、

よろす代もきみか御はしの月影をまつニかけたるすゝむしのこゑされハつたへうけたまはるに、むかし中殿にて御遊あらせられしとき、池月久明といふ題をたまハり、大宮人にハ定家・家隆の君なと聞えし歌人の侍りけるときとかや、こよひ玉しきのミきハに、われらめい〳〵うちむれて、田楽・猿楽にもおとらぬものゝ音に似たるまてもなき、いきとしいけるものなれハ、身にあまりある声を立つゝ、かの御あそひになそらへ、おのかさま

(5オ)
〳〵に啼音をあけにき、また池ニ」すむかはつをはしめ、うたよミ奉と、ミきはのまつのうつる月の、千とせのかけそふ御詠に、猶代々かけて久しかれと、あふき奉るになん、

秋夜於中殿庭上同詠

池月久明和歌

かハつ

なにたてて水のそこにもすむものハ雲井の月とわかみなりけり

よろすよの月かけうつるいけニすむミにあきらけきひかりてりそふ

ほたる

いけミつにとひかふかけハくもりなき月の千とせとともにひさしき

いけ水の玉しく庭に飛ぶ蛍月もわかミもくもらさりけり」

鈴むし

すむ月にふりせぬ物ハ我君かミいけくもらぬすゝむしのこゑ

鈴むしのきミかちとせといはふなる幾よの月のうつる池水

松むし

すむ月の御池くもらぬ万代をまつにかよへるまつむしのこゑ

池水に月やとれとやすミぬらんきミか千とせをいはふまつむし

はた織

月やとる波のにしきを織あけてたへぬ御つきのはたおりそこれ

にしき織の野辺におよはぬいけ水に千とせの秋の月そやとれる」

かまきり

おのかミも玉しく庭に千代かけてすミぬる池の月をミるかな

池水の波のくまをはうちはらひ千よもすむへき月をあふかん

ミのむし

我君かめくミの虫ハくもりなき御池の月そかゝミなりけり

いけ水に月のかゝミのむしなれハいくよの秋の音をやたつへき

こうろき

いけのおもにのとけき月の幾秋か千ゝ千ろりんとすたくむしの音

こうろきの音にたてはこそいくよとも御池くもらぬ」月をこそミれ

たぬき

よろす代をいさやうたはん古狸波のつゝミハ月やうつらん

池水になミのつゝミともろともにうつりし千代のあきの月かけ

きつね

幾よすむ御池の月を守りつゝ人まとハしハあらしとそ思ふ

いく秋の月こそ清きいけ水に玉ものすかたあらはれにけり

諸虫うたふ

宮人ハ桜をかさして出たれと月の笠にハしくものハなし」

おはな

むしさへもきミをいはふと聞なれハそたちてたに千代をまねかん

小萩

宮人の衣にすれる心地して月の照るよのあきはきのはな

なてしこ

しらさきのふめる白すに生立て今日を待へし川原なてしこ

四位のきぬきたるむし

紫の糸こき衣をかしつれハ野なる草木とたれかミるらん」

五位のきぬきたるむし

たまかきのあけの衣ハ月影に猶色はへてミゆるなりけり

『むし双六』各マス墨書一覧

（注）「マス名」のみ濁点を付す。

No.	マス名	画題	和歌	池	月	久	明	和	歌
①	月おもしろきよ	宮人と童	かり衣すそのゝ露を分行はぎはらハぬ袖に月そやとれる	すむよなよな	はるかにかりかりと	世をわたるも	松虫すす虫のいへらく	わらはへの	さてうれしくも
②	松むしすず虫のいへらく	松虫・鈴虫	虫の音のしらへすミゆく神楽岡天津乙女も月に舞らん		さやかなる			みはしなる	
③	世をわたるも	神楽岡遠景	神楽岡木高き松のねに鳴ていくよふりけん鈴むしの声	かけしつはさ			こよひの月に		
④	わらはべの	童・虫籠	年へつゝ小篠かはらハさらさらに露打みたれ秋風そ吹			宮人も		思ふもたかき	
⑤	すむよなよな	禁裏の殿舎カ	今ハたかねさめの友と成ぬらん音をあらそひし虫の声々	ほたる				くすのうらは	
⑥	はるかにかりかりと	雁行	あふくにも限りしられぬ雲の上にむかしながらの月をミるかな						
⑦	さてうれしくも	きりぎりすカ	はるはると雲井をさしてかりハきぬその言つてのたまつさやなそ	かも川つつみ		なてしこの	かりかりと	大宮人の	
⑧	ゆきかよふかりの	雁2羽	なさけある雁のつはさのたまつさハ露よりもなをうれしかりけり						
⑨	かけしつばさ	雁と文	およひなき雲井なれともゆきかよふかりのつはさにかけてたのまん	とかくたのむは		供奉のめんめん		かさもち	
⑩	○（月）さやかなる	神楽岡遠景・吉田社	かくらおか神のすゝ虫松むしハ雲井をかけてなかぬまもなし				たちかへり		
⑪	たましきの	玉虫	うてやうてまへやうたへや神楽岡こよひことに月さやかなり	かいる		まつむし		すすむし	白丁
⑫	思ふもたかき	禁裏カ	すむ月に露の光の玉むしハ雲のうへなる名にこそありけれ			ひはこと	きつねそ		
⑬	宮人も	宮人	のほるへきつはさをかりのたよりにて外にすへなきのへのかや原			雑色		みちをてらし	
⑭	かりかりと	宮人・雁・文	宮人もあハれハかけよ思ひ草一葉をかけし露の玉つさ						
⑮	みはしなる	御庭の竹	はるかなるほとハ雲井の月影をしる人と頼むはつかりの声	おはなかもと			とかくたのむは	随身	
⑯	大宮人の	笛を吹く宮人	宮人のこちくの笛を吹からに竹の虫こそしるへなりけれ			くすのうらは			
⑰	こよひの○（月）に	清涼殿・月	万代とふく笛の音ハ限りなき雲井の月にかよふ成けり			はたをり	車		
⑱	たちかへり【賞を出す】	飛来する雁	野も山もへたてぬものハ久かたの雲井の月の影にそ有ける				はしり雑色	みちをてらし	
⑲	くずのうらは	葛	雲の上の月をかさしにいたゝきて露にもあまる虫のこゑゝゝ	ゆきかよふかりの	わらはへの				
⑳	なでしこの	撫子	むしの音もいろかはるより秋風をうらミはてたる岡の葛原						
㉑	供奉のめんめん	とんぼ・けら・轡虫など	手折つる其つミゆるせ音に鳴くむつましかりしなてしこの花	みのむし	たぬき				
㉒	かさもち	けら・機織り	むしの音をうつさんのミそかり衣月の千くさの花そめの袖			こうろき			
㉓	白丁	紋白蝶を纏う蝗	照月のさすてふかさのえにしあれハあゆミをはこふ玉しきの庭						
㉔	雑色	蝗・蝸牛など	音を立ぬ我こそゆめのこゝちして竹のうてなにあそふてふてふ	こよひの月に					
㉕	随身	松葉の弓矢を携える蝗	つゆしけきいなはのいろのかり衣はらひかねたる姿なりけり		たぬき				
㉖	車	蜂・轡虫・松虫鈴虫・矢車菊	まつのはのゆミやたはさミつゆふかき花田のそてに月そうつれる			きつねそ			
㉗	びはこと（琵琶・琴）	蝗・琵琶琴に見立てた葉	わかせこかのりたるこまのくつはむし今来にけりと声にたてたる	清涼殿					
㉘	はしり雑色	2匹の蜂	四つのをもむつのおこともさゝかにのこよひはれとや蜘のふるまひ		よし田ののへを				
㉙	おばながもとの	狸・月	八千種のつゆをはらふて小車のさきにならひしはしり雑色	かいる	車				
㉚	とかくたのむハ【賞をうける】	狸・萩	降もる木のはかつきて夜なゝハ月をしきねのとこのさむしろ			かけしつはさ			
㉛	ひとりさきにたち	狸・葛の冠	おしなへて草葉にあまるきりきりす露のよすかを頼むとハしれ						
㉜	かも川つゝみ	賀茂川	古たぬき君万代とすむ月にかも川つゝミ声さやかなり	白丁					
㉝	きつねぞ	走る狐	あやしくも人たふらかすきつね火のよにもあくたのもゆる成けり		みちをてらし				
㉞	よし田ののべを	狐火	川そひにめくみのたかく聞ゆるハわか狐火のたより成けり			供奉のめんめん			
㉟	みちをてらし	松明を掲げる狐	思ひすてあさちかはらを行々もまつにそ残るのへの秋風	きつね					
㊱	かいる	蛙	玉の尾のゆらくはかりにきつね火のかも川のへにもゆる也けり		かりかりと		すすむし		
㊲	ほたる	蛍	我君かめくミもあつき皮衣雨にもぬれす風もとふらす	かまきり					
㊳	すずむし	鈴虫（とんぼ・蛍）	音もせてあくかれ出るむねの火の出たるハことにあハれとそしれ		すいしん（随身）				
㊴	まつむし	松虫（蝶・蛍）	すゝむしの声ふりたてゝ行こまのあし音たかく月すミわたる	清涼殿		こうろき			
㊵	はたおり	機織虫（とんぼ・蛍）	君か代の千とせを引ていさ行ん子の日をしのゝ松虫のこゑ		きつね		まつむし		
㊶	かまきり	蟷螂（とんぼ・蛍）	かり人のすそ野におれるはた織の月の千くさのにしききて行			すすむし			
㊷	みのむし	蓑虫（とんぼ・蛍）	かまきりの手にかき分ていさ行ん月にハあへぬかもの川霧	よしたののへ			なてしこ		
㊸	こおろぎ	こおろぎ	久かたの月の照夜ハ君かためミのむしきてもかひなかりけり						
㊹	たぬき	狸	こうろきの音にたてハこそ幾よとも御池くもらぬ月をこそミれ			すいしん（随身）	まつむし		
㊺	きつね	狐	万代をいさやうたハん古狸皮のつゝミハ月やうつらん		まつ虫すす虫のいへらく				
㊻	清涼殿	清涼殿と虫・動植物	幾夜すむ御池の月を守りつゝ人まとハしハあらしとそ思ふ						
			くもりなき君と月との雲のうへにいく秋かけて音をやつくさん						
			宮人は桜をかさして出たれと月の笠にハしく物もなし						